

中村姫一代記

五

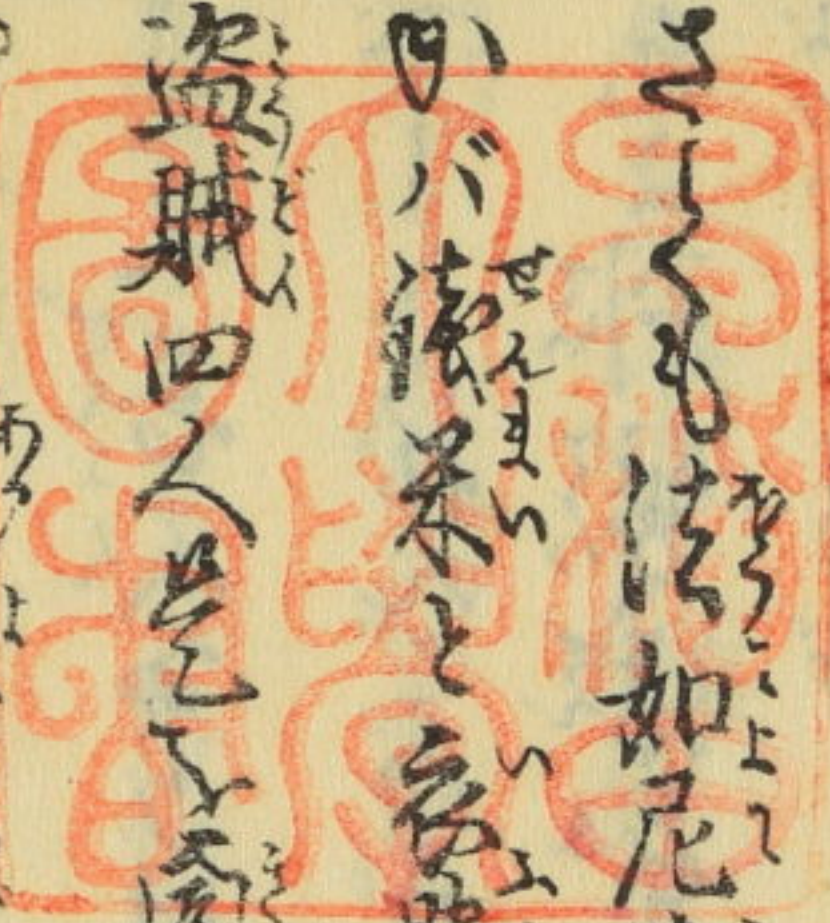
^ 13
3294
5 卅



門へ13
號 3294
卷 5

津將姫一代記卷之五

四人の盜賊蒙教化事



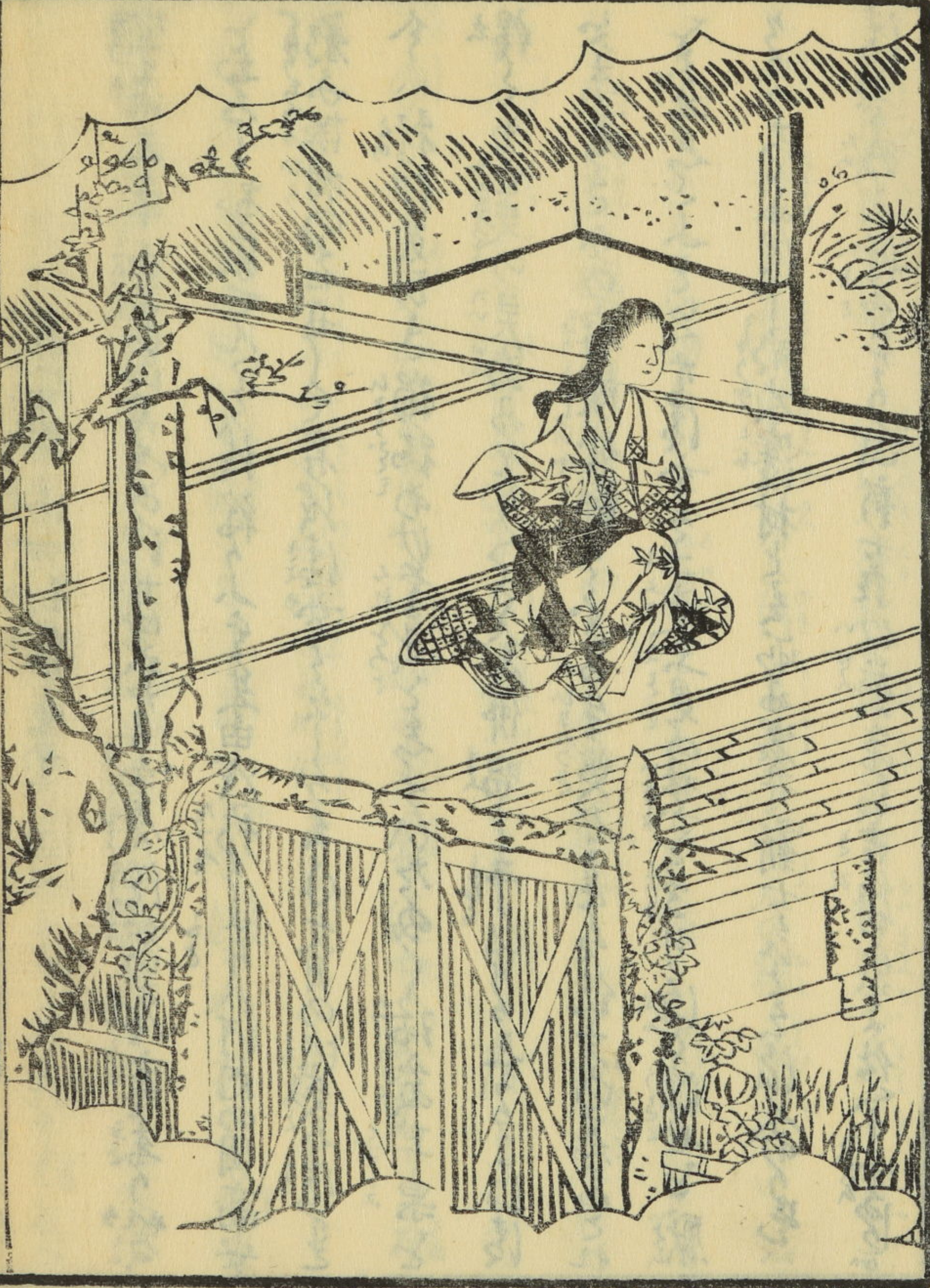
さしとも法如尼漸經書寫其効深ゆりてさめく天驗は
いば法如と名服の供物と奉りともいひたりし行ふ近郷の
盜賊四人はこゝ南菴室か忍入居ると刺殺法物と盜取
ししく威を恐るゝ入るるが子のは兵尼をハ皆く眠るが法如
尼々通衣徑と懐念佛しくとりける四人の盜賊物のけり
窺ふるる法如の姿々佛身と損じ梵天帝教前後と圖とむい
佛子の妙の幽かると後も照種ささまぐり白丹とくありけれ盜賊
まじ體とるるく大か幾とこのる生佛と殺害せんくそと深間

大正十年八月廿九日
本大學出版部 贈

一々と後悔しそ直りたり法如尼のあまのりあり次々と懺悔してはしる何れぞ御弟子とありける香花の御給仕を致し奉りては人二亦の髪とらう法如の御あくあぐたれは法如守りたてさしき奇情なる心入りたまはる也文がまこと人なる上生と文かぐんは情のかりと必一度ハ際るものぞう一途ありて道も起る是又若人ありけしハ見佛圖法の傍由道心堅固丹勤らるべしと承んばる也教訓のあまのり流し流しゆりたるが御之由元は利樂深きと承りたるそ直りたり奉りて高座の丹勤の堂を佛圖の掃除とありたりと承

山下及内法如禪尼は懺悔の事

法如尼今年廿四歳のまもよりや後行拂柳のあまのり教訓さぬかんと奉りてぬをとおしし積りて念佛しておとくろが御の御六十廿年道心若くは御の傍と見たり奉りておとく奉りて奉りて御村殿や奉りてとりたるは法如尼あまのりも念ひたりひたるとさよは後傍りたる某ハ法圖とある後行表がが日本云十條の偏を備ふ靈佛冥社大方廻り入るや御りと法をあひつものツのなぐるまを承りて罪障懺悔のくせ安んじたりと承りて奉りて今般推表はり御村殿を承りて奉りたりやそれば法如守りたてさしき奇情なる事やとのまを後傍り云く愚信承ハ又御師の御父豊成御後の御臺と向くは



岩井新七
清女
おんがの圖



曰く母孫一とて月日もまゐる侍人とて向くべしと心たのしえ
 かかりたる清女支のあざむも手ひく又ハ新七郎毎度来くそびやん
 とてとておのの初子とて子孫の代母ひか尚麻るは逃法
 法如禪尼と附飛れ治とて一も家の中とて道くりたるさる程は言
 安めハ清女支を知らずとて所の清女支とて親の母とてはあま
 りあそ知らん別ち新七郎ハ必志兼ハ女の手をとりて近國近土のこ
 るところへ親をとりあしむとてさうく心去りていと急しく海
 川も舟とてつめたるかともあつひがハあそめ居りたりと
 ところ母豊の女隣はの人あ麻るく親法して被清女母合一が
 今ハ出巻して好ま尼と名とて法如禪尼の屋敷あそく清女の

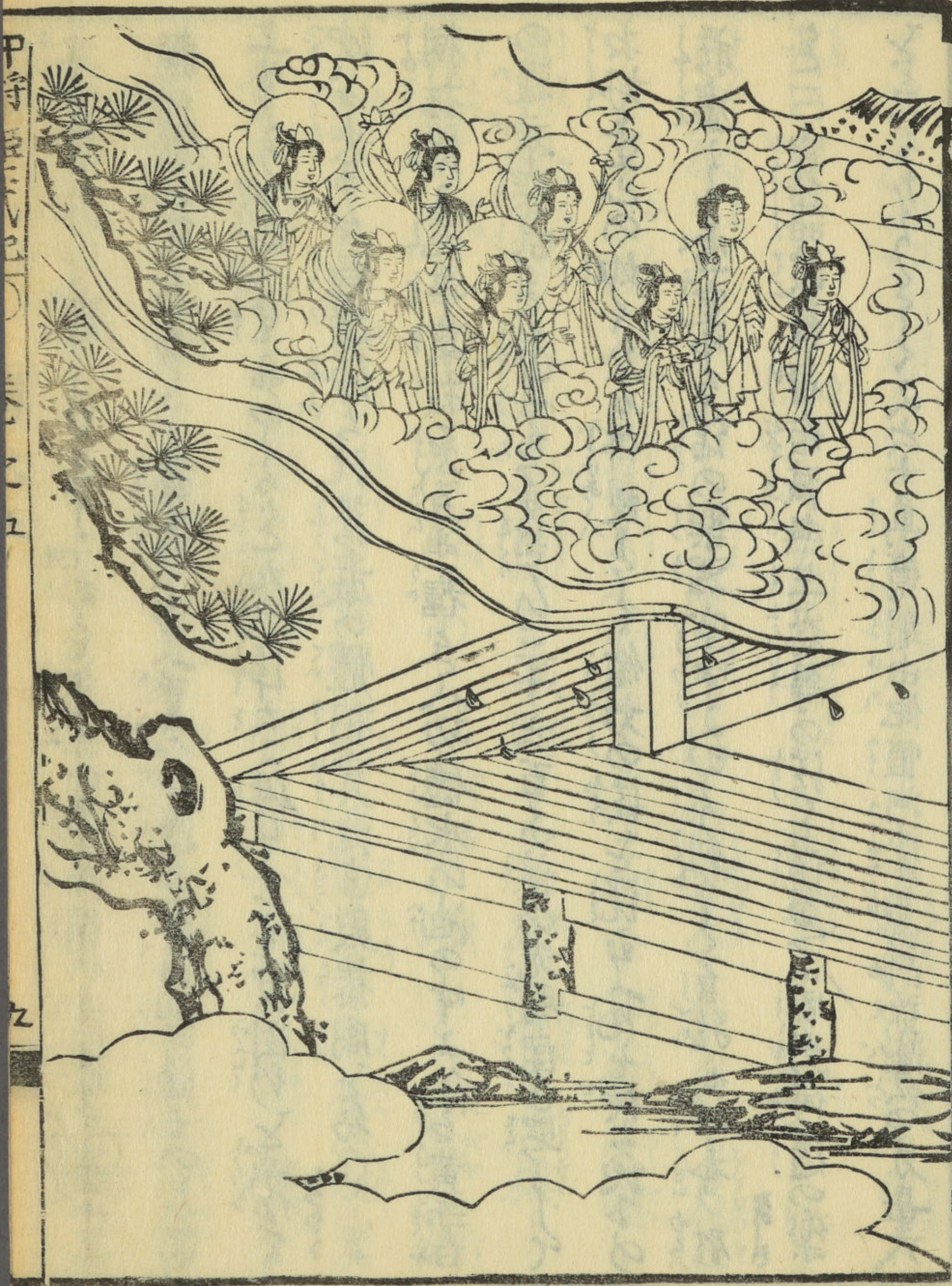
法如と務先念佛して母をとり清法の家新七郎大母願
 依中十とて母の禁裏の女母あそく柳十六夜とてこの母法法如が
 勸めらるくあそめりたるよう守侍とてさうよ又け度母法と難て
 出家でしむくもあそ次舟かりゆきくけ眼と被せんとい文とあ
 ぶりおひたる日のお方よ被尚麻の屋敷あそ好ま尼がゆりの
 者と名あつて一扇ハゆりてとて母あそくとて法如と判とて
 同一の母く好ま尼が首とてちく日のおひと晴とて思ひを
 やい子忽尚麻る母あそりてあそ思候かハはあそ法法如尼の
 母あそ曼陀羅よりえりゆりあそ阿弥陀如來法如母あそ向明日々
 隈め江列高安の女并新七郎とてその母あそ念會とあそ一は

く教伴く論とて一と冥音ありたる果して聖旨降る彼流人
もく業日と乞るる折希好春尼ハ二月の末の番文として春日の
居るりたる法如中女まわりの申するる方ハ河別子安物岩井新
七郎と云者り汝は法如中娘と合あると云へり法如おあせし
吾強く勤るところめあはれ近幸ま中娘と有おの世界と厭い自
力發起して出家と云たり親属のうへに一礼もあぶれと云ふ
恨とら心得極と新七まて云とあさりしうも是と知りぬ
道知くと青くくの申す新七中娘と歎息しと云ふものなり
がりが漸有く法如の前中娘に臥を修くやるるハ俄に某と怒
みたまふい道方と恨張合しと言ゆ中女もあさりしと云ふ

見徹一あまて戒て座人申すをてわける推有代殺害せんとおし
法ましとてと後悔一涙を流し懺悔しければ法如尼も彼らの
柔一彼よるとい生死無常の理と説可し秘んごろ中教訓一あま
彼男いよく陰喜の涙を流し其夜庵室中居りて翌日曼陀羅
を拵し結縁しそけ別中娘りが行あると云ふも出家しと約道と念ふ
て法園淨乃中まきと道名聖園中はとあつるを
法如禪尼諸人申曼陀羅を説可しあま
寶龜五年甲寅法如二十歳の春はくおしあまハ吾五歳の時中
中離してより未子六月ハ又又回の遠忌申あつるを
十七歳の時阿彌陀如来老尼と現して大曼陀羅を授あひく

より十二年母有る者必汝を起てを爲すとの御誓約あり
ちうれハ誓はば安んじんといふ事かきとぞ今此月三十一日
執りて爲すといふ事かきとぞ今此月三十一日
同日八時より九時迄に佛の本依養と勤行
ありては事満座の翌日より諸人と招り集りて言はせめあ
ふ事かきとぞ今此月三十一日
此の孫陀觀音二天聖れ慈悲なる便ありて感得したる大曼
陀羅如來本依の通り具し修してありて爲すといふ事かき
終く見因して厭穢欣淨の信を成ずると爲すと勸進しめ
遠近の男女びびりて信く本堂に集りたる即法如禪尼曼陀

羅めひうひ給半成りてと指示し秋ありては曼陀
羅めひうひ給半成りてと指示し秋ありては曼陀
達多の教めりて父の頻婆娑羅王と牢獄め禁母の韋提希夫人
と紐を接く殺んてを普賢月光の二菩薩の諫よりて剣と
持りてとくまると深宮め押籠る是れ是れとて人達め其就寫
山小向く釈迦如來を念じたり佛を王宮め向くより爲何なり
罪業ありてある惡逆の子と生むる若くは其の事ゆきまれば
ぞや釈ハ佛の慈悲をみけりて成救ひありてなると號めひ何
とぞ佛の御國へ迎へてと歎け佛の眉間より光明をともり
むいそ中より十方諸佛の淨土を現し夫人め拜しめ極楽世界と



中
將
代
護
卷
之
五

七



法如禪尼
臨終廿五
菩薩迎接

中
將
代
護
卷
之
五

八

安樂世界と遊しひる事と明と第二の曼陀羅の在遊定長十二
親の體想をありくと緻著し一帝三下遊母々極樂淨土の上の如
上品より下品までありけると九品淨土は修行する所の因なりと緻著
次中央より極樂淨土は莊嚴の體相寶池宮殿樓閣と初め七寶
樹林園は充華菓枝多寶華輝々八功德水の池の中は黄赤白
の蓮華咲乱と谷其多々ありて三千六百億の光明朗照して
お好まむの如くから佛現して微妙の法を説く凡そ地上地下の
莊嚴より虚空より諸の樂器空中より列々自法妙音あり
と三寶諸波羅蜜寂滅無生忍等の法を説くは佛道の樂
と云ふなりと又六十億億那由他恒河沙由旬の阿彌陀佛の力量八

万四千萬の相好光明ありて佛身より今説法の清堂を流す
諸の上長人と二所は余りく迦陵の梵音より悦び妙ありはと
君を聴聞し又いもろくの菩薩及び土の衆生の心ありは十
よりある無數の念佛は是のく皆因に二十二相八十種好の覺體
自法の妙腹ありあり無量の聖衆遊よと與お携く宮殿より
樓觀を登りする淨土と照るありは寶池を浴しは蓮臺を遊
びと舉り金銀瑠璃の階より瑠璃の地上を跋擧く旃檀の林に入
り香氣香く熏じて煩惱の汚穢を除け黄金樹林の臺と教を
無明塵勞の眠一時を覺えと見不聞所諸の惱患を六根清徹
して自法の杖樂ありと云ふなりと又三上天下たらくは釈迦無

早の言めく流ども盡がとのゆゑ無数の莊嚴と波婆よ居ぶる
眼あめ抱見えもまふ彌陀觀音二聖の慈少と曼陀羅華結
強一ゆめ故なり見國の通俗さる代疎母とよとたうとあまは
くくのぞくありとて淨ちにもくむの樂果と得ととるふは
生極樂の業因と極處一其業因と八曼陀羅華著の西の定散二
善のゆめあり定善と八慮を息く心と定一散善とと悪と癡
一善をかきとけ二ゆとなくはまの彩いと来ると定散の機と
之かり下三ある念佛の業因中と十惡五逆の罪人臨終ゆ善が識
母あつく一と十念ほ彌陀佛の名號と唱く注生とて説きとり
まうれば末世の成生念佛一處又繫想を西方よ注く此佛の

彩か母進り但ひとく母縁名念佛せざらん聖男女有智無智有福
無罪俱未當来かかれば後ちあましく戀をば至普現文珠とい
くく蓮花をかきとて念たりとたりなりぬのぞくは如尼目と
あまのく親ゆめ説示しあまを聽國の端人信が歡喜の涙をば
し力の並おもあまを踊躍してこそ退散せり

法如禪尼臨終淨化の事

人皇甲九代光仁天皇寶龜六年乙卯法如禪尼廿九歳のま熟は
ともひあまの母が十六歳母して世上塵行とのぞくは後林
母へより乳本明の身目と過行もあまを十由年より穢よ
月の雅塵らこと回もたかく十七歳のま平生の志報をうらへ一天

世二の曼陀羅を感得一 妙く想を變相せしと速く蓮華
中任せんを以て本むを以て本の禪尼若くの中あふなり
十二の月あるまに二月必と汝汝迎ひと言ひ今今も
如何に安樂の善城を以て今月来月をうありと昵近の空
尼前中野くく水にけれ水若浄去の再念と變りむひく爾より
以来往生のこもあつてこれハ世ののこらにゆまじくぬん浦経念佛
の如地事方なりやう彌陀の迎候を以てゆまじく二月下旬
あつたりぬまじく櫻梅桃李の爛熳と變りぬくともあつたり燈の虫
の逆光をくく七寶珠の夢を弄じり唯今ありともも勇まじり、
出入の息も稱名念佛の外他なりなりなり十二日のあつたり

洗浴して身は清く盥嗽く西に向く端坐合掌して往生の時起
ゆるけむりあつたり十日午の時念めく眠るがごとく息絶せし
あつたりは空を虚空の中海へ入る青白なるもくもくもくの上は
ま光明耀々く化佛菩薩の迎接と得く聖瑞不思議の法と
遂むひかりは天端と見聞する老若貴賤も肉も有り集り菴
室と園と徒く陰森の森を流し同音に念佛く結縁する
有數をまじりてやうとまじりては如比丘尼の入寂一の中庵室と
紫雲庵と号し後護念院と改む比丘尼亦かく曼陀羅堂
日この信養法事なる事なり一寛水の尼知恩院の善譽實
とこの信養法事なる事なり一信院ともまじり今今も

毎年法如尼の正忌申々迎接令瓜執以今尚存
供養と云ふ事あり

中將姫一代記卷之五大尾

津逮堂藏版

京都市三條通御幸町角

吉野屋 大谷仁兵衛

